

令和六年度新宿区夏目漱石コンクール わたしの漱石、わたしの一行

中学生の部 最優秀賞

「心を自由に」

学習院中等科 3年 深田 柰義

作品名『吾輩は猫である』

選んだ一行 いくら自分がえらくても世の中はとうてい意のごとくなるものではない、落日をめぐらすことも、鴨川を逆に流すこともできない。ただできるものは自分の心だけだからね

全編皮肉が効いている。当時の高等遊民と呼ばれるインテリ知識人と拝金主義の実業家達を、猫の視点で語るのをいいことに、情け容赦なくコキ下ろしている。

しかも猫の主人は作者がモデルらしいので、自らをも容赦なくブツタ斬るその心意気は気持ちがいいぐらいだ。ただしそこに適度なユーモアがあるから読後感はそれほど悪くない。その辺りが漱石のセンスのいいところなのだろう。

僕が印象に残ったのは第八話での、苦沙味の旧友でヤギのような顎髭がトレードマークの哲学者、八木独仙が語る場面だ。

この回で珍野家の隣にある落雲館中学校の生徒が、何度も庭に野球のボールを打ち込み、苦沙味はそのたび激怒する。その後訪れる主治医、甘木先生の催眠術も苦沙味には効かない。何もかもが嫌になった苦沙味に、最後に訪れた八木が語る言葉が以下の一行だ。これが印象深い。

『いくら自分がえらくても世の中はとうてい意のごとくなるものではない、落日をめぐらすことも、鴨川を逆に流すこともできない。ただできるものは自分の心だけだからね』

この哲学者は、苦沙味の元に訪れる他の人間のように知識を振りかざすこともなく、しごく落ち着いた態度で「心の修行をつんで消極の極に達するべし」と説く。それを彼は「消極の修養」と呼ぶ。

この思想は積極的行動をよしとする西洋的思考とはおよそ対極だ。八木は「積極的行動だけではどこまでも行っても不満足な人生しか生きられない」と揶揄する。「心の落ち着きは死ぬまで焦ったって片づくことがあるものか」と訴える。そうではなく「根本的に周囲の境遇は動かすべからざるものだといいことを前提に、その中で安心を求め手段を考えろ」と説く。「ただ一つ自分のものである心を自由にする修行をして安心を得ろ」と。

八木はとどめとばかり『電光影裏に春風を斬る』という、かつて無覚禪師という坊主が説いた文句を引用して苦沙味（および語り部の猫）を完全にノックアウトする。

僕も読みながら、この思想は個人主義が蔓延している現代においても有効なものではないかと共感してしまったのだが、次の第九話で大きくしっぺ返しを喰らった。この回では苦沙味の悪友である迷亭が、八木独仙がいかにかに薄っぺらで器の小さな人間かを徹底的に暴露するのだ。これによって八木の思想をそっくりそのまま会話に引用していた苦沙味も赤っ恥をかかされてしまう。そして僕も。漱石よ、どこまで意地悪なんだ、あなたは。

だが、それでも「自分の心だけは意のままにできる」という、八木のしなやかで力強い言葉は、今のストレス満載の世の中に生きていく僕にはとても素敵に響いてしまう。八木の思想が時代を何周も回って、かつてのように冷笑されることなく受け入れられることを僕は密かに期待したい。